様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００３４４

研究課題名（和文）中国古典詩及びその解釈の言葉と漢訳仏典及び禅の語録の言葉との関係についての研究

研究課題名（英文）How are the words of Chinese classical literature and their annotations concerned with the words of Buddhist literature translated into Chinese and the quotations from Zen priests?

研究代表者
佐竹　保子（SATAKE, yasuko）

大東文化大学・外国語学部・特任教授

研究者番号：２０１７０７１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：謝霊運（385～433）を創始者とする中国六朝時代後期の山水詩、およびそれらに対する注釈者・評者たちの言葉を解読することによって、謝霊運最晩年に書かれた詩に対する、清代に行われて今も踏襲されている校勘が誤りであることを証明し、詩の言葉と共通性を有する言葉を含む当時の仏教文献を探索して精読し、その文脈を重ね合わせることで、詩の読解を深めつつ、詩に対する仏教思想の浸透を探り、中国山水詠出現の要因の一端を考察するとともに、謝霊運最晩年の詩が唐代禅思想に先駆ける一面を持つことを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、中国六朝期の文学について、文学研究者と仏教思想研究者が連携して共同研究を行った、管見の限り稀なケースであり、当時の文学における仏教思想の影響を従来より具体的に提示した。また当時の山水詠は、紀元前の「詩言志」説や二～三世紀の「詩縁情」説といった詩歌観からは生まれがたく、むしろ情の滅失や浄化を願う対象への「観」としてとらえうる。よって、この時期に、仏教思想を介して文学観の転換が起こっていることを示し、さらに従来の詩歌観が「情」「志」に固執する人中心主義homocentrismであるのに対し、新たな詩歌観は命中心主義xenocentrismで、現代的課題に連なる一面を有することを示した。

研究成果の概要（英文）：Xie Lingyun(385~433)'s poem Ru Huazigang shi Mayuan disangu ye(Go into Huazigang that is the third valley of Mayuan) was written in his later years. Many scholars revised the first character of the last line of this poem, however, we've found their revision is wrong, and found the words of this last line are concerned with Xie's dialog writing about Buddhism, Xie's way of thinking in this poem is similar to Zen thought of Tang period.

研究分野：中国古典文学

キーワード：中国文学　六朝詩　仏教思想　漢訳仏典　禅語録

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中国六朝時代後期に出現する山水詩が、仏教思想の影響のもとに生まれたということは、1970 年代から、おもに日本人研究者によって提起されてきたが、しかしそれがいかなる考え方のもとにいかに生成されたかについては、十分な説明が与えられてきたとはいい難い。のみならず近年では、山水詩の主たる生成要因は、仏教思想ではなく老荘思想や道教思想であるとの説も復活してきている。もとより当時の仏教思想は、いまだ格義仏教の色合いを払拭しきっておらず、老荘の語を用いることも多かった。また、その教義が整いつつあった当時の道教が、仏教の影響を受けて、教理や言葉の面に類似性があったことも、事実である。とはいえ例えば、山水詩の創始者とされる謝霊運（385～433）が、当時の江南仏教の大檀越で、仏教学に余人以上の深い造詣を持ち、仏典の改訳にまで参与し、インド音韻学にも精通していたことは、歴史学、思想史学、語学等の分野においても、つとに明らかになっている。彼の、管見の限りでは前例を見ない清新で衝撃的な山水詠が、外来新思想の受容と理解によって生まれたことは、ほぼ確実と考えられる。

その謝霊運「江中の孤嶼に登る」詩の山水句について、1970 年に小川環樹氏は、「仏教の浄土観というようなもの」である仏教的な「一つのビジョン」が、「彼の実際に見ている山、川」に重なったと指摘した。他方、報告者は、2015 年度～2017 年度の科学研究費助成事業 15K02430（基盤研究（C）（一般）、代表者：佐竹保子）に従事した折、小川氏の上記の指摘と相い似た内容が、中国清代の沈徳潜（1673～1769）によって、すでに示唆されていることに気付いた。沈徳潜は、異文のある当該句を、李善（7 世紀後半）注『文選』のテキストによって読んでおり、句中の文字音との共通性から、謝霊運が改訳に参与した南本涅槃経の一節を想起して書き記した。かくてその一節を含む南本涅槃経中の物語が、当該詩に重なり合う効果が導きだされた。沈徳潜のその一文は、小川氏の指摘よりも、根拠資料の裏付けをもつさらに精緻な読みであったが、しかしその一文が余りに短く暗示的であるためか、従来ほとんど注目されてこなかった。

上記の気づきから、報告者は、以下の事どもを学んだ。すなわち、詩の読解には歴代の注釈者や評者たちの言葉が予想以上に有用であること。しかしその言葉は往々、断片的暗示的で簡潔を極めるため、かなりの注意力をもってしても、容易には掬いとりがたいものであること。けれどもそれらを手がかりに、詩の言葉と共通する要素を持つ仏教文献を探りあて、後者の文脈を前者に重ね合わせることで詩の読解を深めつつ、仏教思想からの影響を考察することが可能であること。そのようにすれば、中国六朝後期の山水詠出現の要因を、漠然とした思想内容ではなく、そこに用いられている言葉へとより焦点を絞った形で、考究することができると考えられた。

２．研究の目的

中国六朝時代後期の山水詩、およびそれらに対する注釈者・評者たちの言葉を丁寧に解読することによって、それらと共通性を有する言葉を含む、当時の仏教文献を探索して精読し、その文脈を重ね合わせることで、詩の読解を深めつつ、詩に対する仏教思想の影響を探り、中国山水詠出現の要因の一端をあきらかにする。

３．研究の方法

1. 2015 年度～2017 年度科学研究費助成事業 15K02430 に従事していた折に、当然ではあるが研究対象とする時代の文献に異文が多いことを痛感した。それゆえ、研究対象となる詩を収めた総集・類書・選集・別集等を蒐集し、書誌学的文献学的に考察した上で、校勘記を作る。
2. 上記 1 の総集・類書・選集・別集等は、それぞれに写本や版本の複数のテキストを持っている。よってそれらの異文をも、把握する。
3. 科学研究費助成事業 15K02430 に従事していた折、当該詩の注釈者・評者たちが、同一のテキストを見ているわけではないことを確認した。よって彼らが、どのテキストの文字で解読していたかをつきとめる。
4. 上記 3 の注釈者・評者たちは、自らも校勘を行っており、自らの見たテキストの文字を変えることがある。彼らは、正当な根拠や理由のもとに文字を改変する場合もあるが、根拠が無いのに単なる憶測で文字を変え、それを校訂と称する場合もある。よって、彼らの校訂の根拠を考察し、前者の場合と後者の場合とを峻別した上で、後者をしりぞける。
5. 上記 1～4 によって研究対象の文字を定めた上で、研究対象と歴代の注釈者・評者たちの文章を、後者が隠微に踏まえている典故をも明らかにしつつ精読し、後者をおもな手がかりとして、研究対象と同じ文字を重要な箇所に用いている仏教文献を探索する。
6. 上記 5 で見出した仏教文献を、その言葉を含む一段の文脈をおさえつつ、精読する。
7. 上記 6 によって把握した文脈を研究対象に重ね合わせ、研究対象への読解を深めるとともに、仏教思想の浸透の深度をはかる。

４．研究成果

本助成事業研究の一年目には、研究代表者と研究分担者が、各 2 篇の論文を、学術雑誌『關西大學　中国文學會紀要』39 号、『集刊東洋学』120 号、『中国俗文化研究』15 号に発表した。研

究代表者の佐竹「『旧唐書』音楽志訳注稿（四）」は、945 年に成立した『旧唐書』音楽志の訳注を作成したもので、その過程で仏教関係の語彙も探索した。また、佐竹「謝霊運「華子崗に入る是れ麻源の第三谷なり」詩末聯と胡克家と郭慶藩」は、謝霊運「華子崗に入る是れ麻源の第三谷なり」詩末聯冒頭の一語「恒」について、清代の文選学者胡克家（1756～1816）が、当該詩の最古の注釈である唐代の李善注を根拠として「恒」字は「常」字の誤記であると主張した説をとりあげた。この説は、現代の研究者たちにも踏襲されているけれども、胡氏の論理は、李善注の体例や胡氏自身の校勘の原則とは矛盾しており、成立し得ないものであることを論じた。その上で、「恒」字のままに解している荘子学者郭慶藩（1844～1896）の説を取りあげ、論理的にも解釈の上でも、郭説が妥当であることを論証した。郭説は、文学書ではなく『荘子集釋』という彼の思想書に簡潔に記されているため、文学研究者からは見逃されているが、しかしじつは謝詩の読解にきわめて有効であり、詩の読解には思想書にも広く目を通す必要性があることを示した。研究分担者の齋藤「五代宋初仏教史書閲読札記」は、10 世紀前半から中頃に至る仏教関係の史書を取りあげ、その重要性を示した。また、齋藤「鄭愚「大ギ（さんずいへんに「為」字）山大円禅師碑銘」考」は、晩唐の高官である鄭愚が、866 年に禅僧ギ山霊祐（771～853）のために書いた碑銘を解読し、当時の士大夫と禅僧の間に共通していた認識、すなわち、是非得失への分別を離れ「宗」にも「師」にも否定的である思想傾向を見出して、それが廃仏を契機とした、教化や伝法についての深刻な反省に基づくものであることを論じた。

以上のほかに、佐竹は 1 件の講演を、齋藤は 1 件の国際学会での発表を行った。

二年目には、研究代表者の佐竹が 3 篇の論文を、学術雑誌『關西大學　中国文學會紀要』40 号、『集刊東洋学』121 号、楊玉成・劉苑如主編『今古一相接：中国文學的記憶與競技』（台湾中央研究院中國文哲研究所発刊『文學與宗教研究叢刊』09）に発表し、研究分担者の齋藤は、1 篇の論文を、『集刊東洋学』121 号に発表した。佐竹「『旧唐書』音楽志訳注稿（五）」は、前年度に発表した「『旧唐書』音楽志訳注稿（四）」の続編である。佐竹「恒に俄頃の用に充つ、豈に古今の為めに然らんや――信仰告白としての「華子崗に入る是れ麻源の第三谷なり」詩」は、前年度に発表した「謝霊運「華子崗に入る是れ麻源の第三谷なり」詩末聯と胡克家と郭慶藩」の考察の基礎の上に、謝霊運最晩年の詩の言葉が、彼の仏教論文である「弁宗論」の言葉に類似することを指摘し、後者の文脈を前者に重ねて読むことができること、そして詩の発想を、唐代禅の先駆として位置づけうることを論じた。佐竹「「亂流趨正絶」與「亂流趨孤嶼」」は、謝霊運「登江中孤嶼」詩の異文に対する文献学的修辞論的考察から、それを謝霊運自身が改訳に参与した南本涅槃経の文脈に重ねうること、その点は清代の沈徳潜がすでに示唆していることを示した。齋藤「『続高僧伝』訳経篇に見える三教関係記事について」は、道宣（596～667）の編著『続高僧伝』から、儒教・道教・仏教の三教交渉の様相を探究した。

また、齋藤・衣川共著の図書『新国訳大蔵経第 7 冊／六祖壇経・臨済録』は、齋藤が「六祖壇経」を担当し、唐代の禅語録に詳細な訳注を施した。ほかに、佐竹は国際学会での招待発表を 1 件行い、齋藤は国内学会での発表と国際学会での招待講演を、各 1 件ずつ行った。

三年目は、研究代表者の佐竹が 2 本の論文を、『語言教育研究論叢』38 号と『六朝學術學會報』22 集に発表し、研究分担者の齋藤が 1 本の論文を、『集刊東洋学』124 号に発表した。佐竹「謝霊運「江中の孤嶼に登る」の「江南」「江北」――その詩語としての意味――」は、謝霊運「江中の孤嶼に登る」詩の初聯にある「江南」「江北」という言葉について、従来の研究がそれらを詩人の実際の足取りを指すとするのに異を唱え、「江南」「江北」はそれらを用いている歴代の詩賦群の文脈や含意をゆたかに帯びる詩語であり、「江中の孤嶼に登る」詩の中核部分にある宗教体験の表出を導く鍵言葉であることを論じた。佐竹「謝チョウ（月へんに「兆」字）「遊東田」末聯にかかわる　二、三の問題」は、謝霊運の同族でその後輩にあたる謝チョウ「遊東田」詩の解釈史をたどり、その末聯の「不～、還～」の句法に対して、唐代すでに二種類の相互に異質な解釈が行われていたにもかかわらず、近年最古の解釈が無視されてきた実態を明らかにし、その上で二種のどちらが妥当であるかを、論理的実証的に検証する必要があることを示した。同時に、該詩最末字の「郭」が謝霊運「富春渚」詩の「郭」字の含意を襲っていること、それゆえ従来のような「城郭」「村里」という限定的意味に狭められるべきではないことを論じた。齋藤「『続高僧伝』感通篇・釈道英伝に見る中国六・七世紀の仏教」は、中国六朝末期の仏僧たちの行為や言説が、のちの禅宗に近似していることを明らかにした。

さらに齋藤は、1 件の国際学会での発表を行い、また図書『中国禅宗史書の研究』を上梓した。図書は、唐代から北宋初期に至る禅宗史書を精細にたどり、初期の禅宗の信仰者たちの多彩さと多様さを如実に浮き彫りにしたもので、該図書および齋藤の前掲論文が明らかにした中国六朝後半期の仏教界の様相は、研究代表者の佐竹に大きな教示を与えた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 齋藤智寛	４．巻 124
２．論文標題 『続高僧伝』感通篇・釈道英伝に見る中国六・七世紀の仏教	５．発行年 2021年
３．雑誌名 集刊東洋学	６．最初と最後の頁 66-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐竹保子	４．巻 22
２．論文標題 謝チョウ（月兆）「遊東田」末聯にかかわる二、三の問題	５．発行年 2021年
３．雑誌名 六朝學術學會報	６．最初と最後の頁 43-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐竹保子	４．巻 38
２．論文標題 謝霊運「江中の孤嶼に登る」の「江南」「江北」――その詩語としての意味――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 語言教育研究論叢	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐竹保子	４．巻 40
２．論文標題 『旧唐書』音楽志訳注稿（五）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 關西大學　中國文學會紀要	６．最初と最後の頁 11-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐竹保子	4．巻 121
2．論文標題 「恒に俄頃の用に充つ、豈に古今の為めに然らんや」――信仰告白としての「華子崗に入る 是れ麻源の第三谷なり」詩	5．発行年 2019年
3．雑誌名 集刊東洋学	6．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐竹保子	4．巻 0
2．論文標題 「亂流趨正絶」與「亂流趨孤嶼」――讀謝靈運〈登江中孤嶼〉一詩	5．発行年 2019年
3．雑誌名 今古一相接：中國文學的記憶與競技	6．最初と最後の頁 387-415
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 齋藤智寛	4．巻 121
2．論文標題 『続高僧伝』訳経篇に見える三教関係記事について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 集刊東洋学	6．最初と最後の頁 22-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐竹保子	4．巻 39
2．論文標題 『旧唐書』音楽志訳注稿（四）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 關西大學　中國文學會紀要	6．最初と最後の頁 27-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐竹保子	4．巻 120
2．論文標題 謝霊運「華子崗に入る 是れ麻源の第三谷なり」詩末聯と胡克家と郭慶藩	5．発行年 2019年
3．雑誌名 集刊東洋学	6．最初と最後の頁 40-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤智寛	4．巻 15
2．論文標題 五代宋初仏教史書閲読札記：以雅俗概念為中心	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中国俗文化研究	6．最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤智寛	4．巻 120
2．論文標題 鄭愚「大ギ山大円禅師碑銘」考―士大夫と晩唐禅仏教―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 集刊東洋学	6．最初と最後の頁 78-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　3件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 齋藤智寛
2．発表標題 《続高僧伝・雑科声徳篇》所見説法師的活動：以釈真観和《聖武天皇宸翰雑集》為中心
3．学会等名 「2020仏教文献与文学」国際学術検研討会（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 佐竹保子
２．発表標題 日本人如何接受杜甫文学？
３．学会等名 北京論壇2019文明的和諧与共同繁栄：分論壇四饋贈与交融：中華文明的伝播（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 『続高僧伝』感通篇・釈道英伝の諸問題
３．学会等名 第68回東北中国学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 《続高僧伝・感通篇》閲読札記
３．学会等名 《続高僧伝》研読班（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐竹保子
２．発表標題 熟成する七律――揺らぐ器に盛る「言い難き」もの
３．学会等名 2018年度東北シナ学会4月例会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 《続高僧伝・訳経篇》所見三教争論材料二則
３．学会等名 第五届仏教文献与文学国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 『続高僧伝』感通篇と禅仏教―釈道英伝を読む―
３．学会等名 「国際禅研究プロジェクト」第3回研究会（第Ｉ部会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 齋藤智寛	４．発行年 2020年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 471
３．書名 中国禅宗史書の研究	

１．著者名 衣川賢次、齋藤智寛	４．発行年 2019年
２．出版社 大蔵出版	５．総ページ数 464
３．書名 新国訳大蔵経［中国撰述部］第7冊　[禅宗部]　　六祖壇経・臨済録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	齋藤　智寛 (SAITO tomohiro) (10400201)	東北大学・文学研究科・准教授 (11301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関